泌尿器科で手術治療再開

久末氏が低侵襲ダビンチ手術

恵佑会札幌

札幌市白石区の恵佑会札幌病院（高橋宏明理事長、久須美貴哉院長・229床）は、4月から泌尿器科部長に久末伸一氏が就任、前立腺や腎臓、膀胱などの外科手術を再開した。ダビンチを使ったロボット支援手術は、短時間手術で、患者の負担を軽減。前立腺がん治療は順調に患者数が増えてきており、順次、適応を拡大していく考えだ。また、男性更年期外来を開設。必要に応じて手術治療も行い、男性のさまざまな悩みに対応している。

同病院は、地域がん診療連携拠点病院に指定されており、手術支援ロボットダビンチを2台備え、多くの手術をロボット支援手術に移行。さらに2021年に現在地に移転し、最新検査機器の導入や手術体制の強化といった既存路線の充実とともに、各種在宅サービスとの連携強化を図り、がんの早期発見から手術治療、緩和ケア、在宅療養まで円滑な医療提供体制を構築した。

一方、泌尿器科は医師不足により一時的に手術対応ができなくなり、常勤医1人体制で外来診療を行ってきたが、今回の人事で泌尿器科は新田俊一医師と常勤医2人体制となり、ダビンチ手術は久末部長が担当する。

久末部長は、札医大を1995年に卒業後、同大病院、米国マサチューセッツ大留学を経て、帝京大、順天堂大、国際医療福祉大成田病院などで数多くの手術を担当。これまでに開腹・腹腔鏡下手術は2000例、ダビンチ手術は800例以上を行っている。

ダビンチ手術は、まず前立腺がんからスタート。これまでに5件を終えて、7件以上の予定が入っている。このペースでいけば、早期に保険適応の基準を満たすことが想定される。さらに腎臓、膀胱とダビンチ手術の範囲を早期に拡大させていく考えだ。

「ダビンチは道内全体で47台、札幌だけに限ると22台が稼働しており、全国的にみても過密状態となっている。当院ならではのメリットを打ち出し、他施設と差別化を図っていきたい」と久末部長は話す。

その一つが、ダビンチ手術の手術時間だ。久末部長が行うダビンチ手術は、コンソール操作時間が平均70分ほどで済み、一般的な120分と比べて非常に短時間となっている。時間が短ければ、麻酔時間も短くなり、出血は60cc程度に抑えられる。ほとんどの手術で輸血の必要が無く、合併症予防にもつながっており、患者の負担が少ないのが特徴だ。

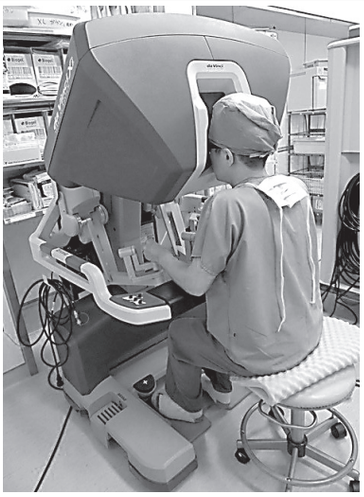
同病院は消化器系を中心にダビンチ手術をはじめ、さまざまな低侵襲手術を行っている。4月には数多くの肝胆膵外科手術を手掛け、高度技能専門医として認められている、森本守氏が消化器外科部長に就任するなど、各分野のスペシャリストがそろう。

「各科の優れた医師と連携し、幅広く消化器系のがん治療ができるのが、当院の強み。一緒に手術を行うことで、医師同士、互いの高度な技術を学ぶことにもつながり、それがさらなる医療の質の向上につながっていくはず」と相乗効果に期待する。

◆

水曜日の男性後年障害外来も担当。東京の病院や精神科クリニックで数多くの男性更年期患者の治療に携わっており、こちらも専門分野としている。男性ホルモン補充療法のほか、ペロニー病など男性性機能に関しては手術療法も行う。

更年期障害は女性の方が4倍多いが、更年期障害によってうつ病を発症し、自殺にまで至ってしまうケースは、男性の方が4倍多いという。「早ければ30代後半から、更年期障害が始まることもある。本人が更年期障害だと自覚せず、長く不定愁訴で苦しんでいることも少なくない。男性更年期障害について啓発し、本人や家族、かかりつけ医が気軽に相談してもらいたい」と話す。



ダビンチ手術は短時間で出血量の少なさが特徴

久末泌尿器科部長